

日本学術会議
科学者委員会 学術誌問題検討分科会（第9回）
議事要旨(案)

1. 日時 平成25年9月11日（水） 16:00－18:00

2. 会場 日本学術会議 5-C（1）会議室

3. 出席者：浅島委員長、北里副委員長、田口幹事、植田幹事、矢野委員、嶋田委員、
須田委員、長野委員、北村委員、松岡委員、吉田委員、玉尾委員、谷藤
委員、永井委員、林委員、 15名

欠席者：小松委員、辻村委員、古田委員、 3名

事務局：盛田参事官、辻上席学術調査員ほか

4. 配布資料

資料1 第8回議事要旨（案）

資料2 Open Access Working Group 報告

参考1 委員名簿

参考2 OA WG 検討メモ

参考3 GRC、ICSU、IUPAPなどで議論するOA化のためのAction Planメモ

参考4 EUROPEAN COMMISSION PRESS RELEASE

5. 議事

1) 前回議事要旨（案）の確認

資料1によって前回議事要旨の確認を行い、一部の訂正が指摘され、これを修正することを前提として、議事要旨案が了承された。

2) ワーキンググループにおける議論の紹介について

植田幹事から、資料2及び参考資料2によって、Open Access Working Group の報告が行われた。ポイントは次の通り。

・Open Access Working Group では、現実的な方向を提案するために、最初にできるだけ問題点を洗い出し、それらを下敷きにした上で検討するべきという考えに立ち、自由に議論を展開してきた。今日の報告は、これまでの議論のポイントを紹介し、分科会委員の意見（異なった立場からの批判、コメント）を受け止める機会としたい。

・Open Access に関する検討課題は次の5つの項目がある。

1. 海外からの情報

海外からの情報として、英国のOA化勧告であるFinchi Report、OECD Principle、GRC Action Plan、EU Commission Report などが主要な物であり、最新の情報では、EU Commission はOAに対して強い決意を表明しており、その議論から、OA化問題は「議論の段階」から「現実の問題」へと移行したと考えられる。

2. Open Access 化を見る視点

Open Access 化を見る視点として、OA Journal の歴史（低級OAジャーナル問題）、OA出版に対する内在的要求（知識共有、情報公開要求など）、Citation 向上のためのOA化、ジャーナル経営の視点から見たOA化、研究論文の増加と購読料高騰の関係、学術出版における経済学などがある。

3. Open Access 化を巡る情勢

Open Access 化を巡る情勢として、国家レベルの出版競争、わが国の学術出版能力（技術力の低下）、学協会の収入構造、国内学会はなくなってもよいか（学会活動そのものの危機、世界学会への吸収か）、STM 学会から人文系学会までなどがある。

4. Open Access 化と公的資金、公開原理

Open Access 化と公的資金・公開原理として、公的資金による学術出版をどう考えるか（科研費の研究成果公開・出版補助制度と「世界に対する情報発信」、諸外国の事情）、公的資金による研究成果を公開する責任とは誰に対する責任か（国民に対する公開：Public Access、研究者に対する無料公開：OA Gold 等、国際社会における開発途上国向け OA：OA through ICTP）、「公的資金を使った場合の公的責任は国民に対して負うべき」に対する意見、Public Access その有効性と範囲について、図書館情報学会が考える OA 化とはなどがある。

5. Open Access 化の諸問題

Open Access 化の諸問題として、個人行動会員制度の可能性、Pay-per-View モデルの可能性、負担割合を明示しない意見聴取、OA 化は研究の質の区別に役立つか、PLoS ONE 型 OA 総合誌は必然的な方向か、国際語としての英語に集中すべきかなどがある。

また、谷藤委員から、提言とりまとめ及び 2014 年 2 月に予定しているフォーラムについて次のような提案があった。

まず、提言を 2014 年 2 月のフォーラムまでに行うこと、内容としては、英国 Finch Report（OA 化の勧告）の日本版 Asashima Report(仮)で、OA 化の透明性、トランスペアレンシー、アクセスビリティについて取りまとめるかどうかという提案があった。いずれにせよ、レポートとしてまとめることを前提とした議論を進めるという提案があった。

続いて 2014 年 2 月のフォーラムにおいては、提言を共有する場として、日本の科学者のみならず欧米（出版社の強いドイツ系か、Finch Report のイギリス系か）から人を呼んでかどうかという提案があった。

3) ディスカッション

Working Group の報告を受けて、ディスカッションが行われた。

ディスカッションの結果、OA 化を行う目的は様々あるが、その目的によって適切な OA 化（というツール）の仕様と課題が異なるため、今後、本委員会における OA 化の目的を限定して進めることとした。

本委員会は、科学者委員会の下に形成されていることから、第一番目に、「科学者のため・研究者のため」に「日本発のリーディングジャーナルのような国際発信力の強化を行うことを目的に」を OA 化を行うことにフォーカスすることとした。つまり、国際発信力のあるコミュニティや個人を、OA 化を通じて作っていく方策を考えるということである。第二番目に、それを科研費で何をどこまでするか、公的資金の透明性について考えることとした。これらのことについて、日本の特徴を生かした OA の使い方について探ることとした。

ディスカッションで発せられた主な個別意見は次の通り。

・OA 化によって様々な課題が解決されるかどうかには懐疑的な見解を持っている。単に OA 化しても上手くいかないのではないのか。OA 化が科研費と一緒にすると科研費の無駄遣いにつながるのではないのか。少なくとも科研費の外で行うべきではないのか。図書館にお金がないから OA 化を進めるというのはロジックが違うのではないのか。

- ・和文の論文を国民が読めることが大切なのではないか。英文ではなく日本語で知識が集積されている分野もある。
- ・今一度本委員会の目的、目標を明らかにして議論を進める必要があるのではないか。何を目的とするかが重要である。もしリーディングジャーナルを作ることが目的ならば、現実には可能性があるか検討するべきである。また、2014年2月のフォーラムは外国の事例を知るのはWGで行ってもらい、むしろ、日本のジャーナルがどうすべきかに集中した方がよいのではないか。
- ・議論のストラクチャーをより明確にする必要がある。OA化はあくまでツール（手段）である。何のためのOA化か焦点を絞って、ストラクチャーを明確にして議論を進めないとならない。
- ・個人的には、学会の存続について関心がある。OA化が進んでいったときに、学会員が学会に入るメリットが何か、心配している。日本の学会の在り方についても議論が必要ではないか。
- ・リーディングジャーナルという言葉の意味も多様である。これは明確にして議論をする必要があるのではないか。
- ・学協会の力をつける戦略としては、学会の規模やテーマなどによってそれぞれ異なる。どういう学会を対象として議論を行っているのか、実態をもう少し理解した上で行うべきではないか。
- ・OA化が質の向上に寄与するかということそうでもない。ただ、世界的にツールが変化する（OA化が進む）時は、ジャーナルにとってチャンスであるという認識は重要だと思う。
- ・情報を発信するところに、情報は集まってくる。日本発のリーディングジャーナルは必要である。そのときにどのようなOA化が必要かという議論に絞るのがよいのではないか。
- ・科研費の研究成果をOA論文にすること（科研費をもらった論文はOA論文として投稿すること）と、リーディングジャーナルのOA化（ジャーナルをOA化することにより、ジャーナルの質やアクセスを高めること）は、議論がまったく異なるので、分けて考えるべきだ。何を目的とした議論かわかりにくいように思う。
- ・多くのことがworking groupで議論されており、矛盾を抱えているというのはその通りである。受信（図書館）の議論が行われているが、図書館の予算削減の解決策としてOA化は十分ではない。OA化はあくまで発信（ジャーナル）の問題である。ただし、政治が絡んできており、自分の大学がどれぐらいOA論文が出ているかが評価の対象となってきたという動きは重要だろう。本委員会は、学会とジャーナルの発信力を高めることを目的として、OAをツールとして検討する場としてはどうか。
- ・諸外国においても、OA化は迷走している。問題は発信である。分野によってOA化の意味は異なる。また、OA化でアクセスが向上する場合もあれば、しない場合もある。
- ・科学者委員会の下にある会議なので、この委員会では、科学者のためのOA化がプライマリーで、セカンダリーとして公的資金の透明性があるのではないか。日本の特徴を生かしたOA化を検討するべきではないか。

4) 今後の審議の進め方について

今後は、メールを活用しながらとりまとめをすることとした。

日本発リーディングジャーナルを作ること、国際発信力の強化をOA化によって行うために何をすべきか、JST、JSPS等も考慮に入れつつ検討を加えることとした。

次回は10月30日（水）16：00～18：00の予定。